

天明期益富組の経営発展における捕獲鯨と漁場と運上銀の関係性

末 田 智 樹*

一、はじめに

益富又左衛門組は、平戸藩領生月島御崎浦を捕鯨漁場の本拠地として捕鯨業展開を図り、近世後期の全国長者番付では上位に名を何度も連ねた巨大鯨組であった。経営の発展要因の一つには、複数の中小藩からなる西海地方において、益富組が独自の藩際捕鯨業の海域を構築するまでに鯨組組織を拡大していたことがあげられる。

以上のことを筆者は既に明らかにしており、それを受けて本稿では益富組の天明期（一七八一～一七八八）における運上史料を考察する。理由としては、益富組が捕獲対象としていた取揚鯨の種類と頭数を含めた特色について、平戸藩領域内の捕鯨漁場と平戸藩への運上銀の関係を絡めて明らかにすることで、天明期の益

富組経営の発展要因について一層深めたいからである。

筆者は、宝暦期（一七五一～一七六三）から寛政期（一七八九～一八〇〇）^①にかけて益富家文書の運上史料に関して定性的な分析を重ねてきた。益富組の運上史料の分析については、益富組と平戸藩との運上銀の関係を詳細に分析した松下志朗の先駆的研究がある。^② 筆者は、松下の研究に対して、運上史料のなかに記された捕獲鯨の種類および一頭あたりの運上銀に着目して分析を加え、捕獲鯨と捕鯨漁場と運上銀の関係性に関して次の三点を明らかにした。^③

第一。益富組が主に捕獲していた鯨は、勢美鯨と座頭鯨の二種類であった。この二種類の取揚鯨は、益富組より平戸藩への運上額のかんりの部分を占めていた。

第二。益富組が捕獲した勢美鯨と座頭鯨の一頭あたりの運上額

は勢美鯨が最も高く、その次は座頭鯨であった。また捕獲した両鯨からは、魚運上と油運上に分かれて納められていた。さらに、勢美鯨と座頭鯨の子鯨も運上の対象とされていた。

第三。捕鯨漁場と捕獲鯨の種類の関係については、沓岐の瀬戸冬浦において最も多くの勢美鯨が捕獲され、次いで同じ沓岐の勝本冬浦で勢美鯨が取りあげられていた。沓岐の両浦において捕獲された座頭鯨は、勢美鯨に対して比較的少なめであった。益富組本拠地の生月島御崎浦では、勢美鯨と座頭鯨がほぼ同数捕獲される傾向にあった。

とくに天明朝の運上史料に限って述べれば、拙稿で天明元（一七八二）年冬浦から同二年春浦にかけてと、天明八（一七八八）年冬浦についての定性的な分析を行っている。⁴ 従来、西海地方において捕獲対象とされていた鯨については、主に小川島系・生月島系の捕鯨図説を使用して紹介されてきた。⁵ それに対して益富家文書、すなわち鯨組の原史料から運上を噛み合わせた取揚鯨の分析は、筆者以外に見当たらない。

本稿では、「天明四年辰五月 卯冬辰辰春迄 勝本御崎鯨組御運上指引帳 御勝手方 益富又左衛門殿」および「天明七未五月 午冬辰未春迄 瀬戸大嶋御崎鯨組御運上銀指引帳 御勝手方 益富又左衛門殿」の二つの翻刻を兼ねて分析する。⁶ 今回二つの史料を選定した理由は、筆者が分析を試みた拙稿の天明初・末期の史料に対して時期が中間地点にあたり、「御崎」、「瀬戸」、「勝本」、「大嶋」、「津吉」の五つの捕鯨漁場における捕獲鯨の実態を

同時に捉えることが可能だからである。

翻刻凡例

1. 旧字体等は原則として常用漢字に改めた。ち、へ、而、富については原字体を残した。
2. 人名・地名等の固有名詞については原史料通りにしたものもある。
3. 本文中に読点（、）、並列点（・）を加えた。
4. 本文中の体裁は原則として原史料の記載通りとし、適宜本書形式に合わせ統一した。
5. 片仮名の「ニ」「ル」および助詞の「而」等はポイントを上げて右寄せにした。

二、天明三・四年の益富勝本・御崎組の運上史料の分析

史料一

（表紙）

「天明四年

卯冬辰 勝本

鯨組御運上指引帳
辰春迄 御崎

辰

五月 御勝手方

益富又左衛門殿

」

卯冬^ろ勝本御崎鯨組御運上銀指引
辰春迄

一 銀三拾貫目 勝本浦受銀

一 銀六拾貫目 米先納

一 銀五拾貫目 魚運上先納

一 銀百貫目 油運上先納

一 銀拾五貫目 同所春浦先納

✕銀貳百五拾五貫目

一 銀三拾貫目 生月御崎組米先納

一 銀三拾貫目 魚運上先納

一 銀貳拾五貫目 油運上先納

✕銀八拾五貫目

合銀三百四拾貫目

一 銀八拾三貫六百拾壹匁

但、卯冬勝本組^{ニ而}取揚候鯨數四拾八本之内、勢美本魚貳

拾四本、運上銀五拾四貫目、同親離子見分物貳拾三本、運

上銀貳拾九貫三百拾匁、同志もり鯨壹本、運上銀三百壹匁、

右魚數當^ル運上銀

一 銀拾三貫三百九拾五匁

右同所春浦^{ニ而}取揚候鯨數拾本之内、勢美本魚六本壹最合、

運上銀拾貳貫目、同親離子見分物壹本、運上銀七百五百目、

座頭見分物壹本、運上銀六百四拾五匁、右魚數當^ル運上銀

一 銀百八拾五貫六拾八匁

右同所冬・春魚數當^ル御運上油三千八百五拾五挺之内、

百四拾六挺御台所御用、同百五拾挺、御家中用、引殘

三千五百五拾九挺、代壹挺^{ニ付}五拾貳匁替

一 銀貳拾六貫貳百五拾五匁

但、生属御崎組^{ニ而}取揚候鯨數三拾五本之内、せひ本魚

拾貳本、運上銀拾八貫目、同親離子三本見分物、運上銀

五百五拾九匁、座頭本魚八本、運上銀六貫目、同見分物七

本、運上銀九百四拾六匁、長須本魚壹本、運上銀七百五拾

目、白子四本、運上なし、右魚數當^ル御運上銀

一 銀三拾三貫八百目

但、右同所魚數當定油六百五拾挺、代壹挺五拾貳匁替

一 銀四拾貳貫壹匁壹步三厘

去卯春組差引殘納り前

一 銀貳拾四匁九步八厘

但、勝本・御崎組先納米壹俵貳拾四匁五步替、✕

三千六百七拾三俵壹斗四升八匁渡前之處、三千六百七拾四

俵壹斗四升六合七匁相渡候付、渡越成米

壹俵五合九匁代納り前

合銀七百貳拾四貫百五拾五匁壹步壹厘[㊤]内五拾貫目 前^ニ記勝元組魚運上先納引

同百貫目 右同油先納引

同拾五貫目 同所春浦先納引

同三拾貫目 御崎組魚運上先納引
同式拾五貫目 同所油先納引

残五百四貫百五拾五匁壹分壹厘 納り前

内納り方

一 銀百八拾貫目 寅暮江戸仕出先操納

内百貳拾貫目 子十二月廿日大坂直納

同式拾貫目 子十二月廿三日江戸乗差為替_ニ而

同八貫目 子十二月四日瀬戸内才覚大坂納

④同三拾貫目_式 子十二月四日納り

✕

一 銀百貳拾貫目 卯春相定早春仕出_シ銀貳百貫目割

④内拾六貫貳百目 卯三月十日納り

④同拾五貫目 卯四月十六日納り

④同七貫百貳拾六匁 卯四月十七日納り

④同百八拾目 同日納り

④同三貫六百六拾五匁五步 同日納り

同七拾七貫八百貳拾八匁五步 大坂納メ

✕

一 銀百貳拾貫目 卯盆前々操納貳百貫目割

内拾六貫目 卯八月四日納り

同拾四貫九百目 卯八月十日納り

同九貫百目 卯九月六日納り

同式拾貫目 卯九月八日納り

同六拾貫目 卯六月中大坂納

✕

一 銀八百三拾三匁六分三厘

御台所御用ていら三千四百六拾五斤、代七百七拾九匁七步四

厘、赤身八百七拾六斤、代三拾九匁四步二厘、不りく七貫貳

百目、代拾匁八步、かぶら骨貳貫四百五拾目、代三匁六步七

厘_ニ而

一 銀四貫三百三拾九匁貳步

但、去_ル申年江戸御指支_ニ付御借入銀五拾貫目之内、去四

月末八朱之利四貫八百目、右元銀之内御払入、残り四拾五

貫貳百目卯正月_ニ十二月迄八朱利銀元銀之内払入

④銀四百四拾五貫百七拾貳匁八步三厘 納り高

✕引残七拾八貫九百八拾貳匁貳步八厘 渡り前

✕

右者去卯冬_ニ当辰春迄勝本・御崎組御運上銀・油差引如斯御座候
已上

辰 五月

亀 淵与 助

山口磯右衛門_④

益富又左衛門殿

前書之通承届候已上

喜多川弁 蔵^⑩

日 高治左衛門^⑪

岡 塚藤次右衛門

史料一から捕獲鯨とそれに関連する運上銀については、大別して次の三点が判明した。

第一は、全体の捕獲数と捕獲鯨の種類についてである。勝本組は冬浦の四十八頭と春浦の十頭、御崎組は冬浦と春浦を合わせた三十五頭であった。勝本組では、冬浦と比べて春浦の捕獲数の少なさがわかる。勝本・御崎両組の捕獲数の合計は九十三頭の大漁となり、拙稿で考察した安永八・九（一七七九・八〇）年の捕獲数と同等であった。^⑦なかでも勝本組の冬浦では、「勢美本魚」二十四頭、勢美「親離子見分物」二十三頭、勢美「志もり」一頭を合わせた四十八頭すべてが勢美鯨で占められていた。勝本組は春浦において「勢美本魚六本壺最合」と勢美「親離子見分物壺本」を合わせた勢美鯨九頭を捕獲し、残りの一頭は「座頭見分物」であった。天明三・四（一七八三・四）年の勝本組の冬・春浦では、勢美鯨の捕獲が断然目立っていた。

それに対して御崎組の冬・春浦では、「せひ本魚」十二頭と「同親離子三本見分物」を合わせた十五頭が勢美鯨であり、また「座頭本魚八本」と「同見分物七本」を合わせた十五頭が座頭鯨であった。今後の検討が必要であろうが、壺岐では勢美鯨が比較的

多く捕獲され、御崎浦では勢美鯨とほぼ同じ頭数の座頭鯨を捕獲していた。筆者は、これまで益富組本抛地の生月島御崎浦については、冬浦と春浦の両時期において同程度の鯨を捕獲できる捕鯨漁場として評価していた。捕獲鯨の内訳からわかる御崎浦は、益富組が最も狙いを定めていた勢美鯨を補う形で、次のランクに位置する座頭鯨が捕獲できる捕鯨漁場であった。^⑧従来、壺岐の勝本・瀬戸の両浦は、西海地方のなかで最も優れた捕鯨漁場とされてきた。筆者は、その理由として本研究で新たに勢美鯨を多く捕獲できる捕鯨漁場であったことを、運上史料による実証的根拠に基づき指摘しておきたい。^⑨

第二は、「取揚候鯨数」によって定められた運上銀および運上油についてである。本史料からも、勝本組における冬浦と春浦の捕獲数と捕獲鯨の種類に関わる一頭あたりの運上銀が読み取れる。勝本組が冬浦で捕獲した「勢美本魚」は二十四頭で、一頭あたりは二貫二百五十目であった。勝本組の春浦における「勢美本魚六本壺最合」の計八頭では、一頭あたり一貫五百目であったことが判明する。^⑩御崎組の「せひ本魚」十二頭については、一頭あたりを計算してみると一貫五百目であることから、勝本組の春浦で捕獲した勢美鯨と同等の運上額になっていた。^⑪御崎組では「座頭本魚八本」とあり、一頭あたりは七百五十目であった。^⑫また御崎組では、ほかに「長須本魚壺本」とあり、座頭鯨と同じく長須鯨は一頭あたり七百五十目であった。^⑬

第三は、天明三・四年における益富組の運上銀についてである。

まず本史料から勝本組の冬浦の「浦受銀」は、三十貫目であったことが判明する。次いで米、魚運上、油運上の先納銀は、勝本組の六十貫目、五十貫目、百貫目と、御崎組の三十貫目、三十貫目、二十五貫目と、それぞれに記されている。また、御崎組に「浦受銀」の記載はなく、勝本組の春浦の先納銀は十五貫目であったことがわかる。合銀は、勝本組の二百五十五貫目と御崎組の八十五貫目を合わせた「二口」で、合計三百四十貫目という膨大な先納銀であったことがみてとれる。勝本組と御崎組の先納銀については、拙稿で考察した安永八・九年と同額であり、冬浦と春浦ともに定まっていた。⁽¹⁴⁾

先納の方法に関しては、本史料からは瀬戸内の商人のみが知れるが、拙稿で見受けられた筑前（博多）、下関、長崎などの地方商人とともに、益富組との鯨商品取引の深い関係があったことが汲み取れる。⁽¹⁵⁾ 安永・天明期（一七七二～一七八八）において益富組は、九州北部から瀬戸内海をへて大坂に至るまでの港町において、為替を活用した信用取引を活発に展開していたと捉えておいてよからう。益富組と地方都市商人との取引関係に関しては、これまで主に文化期（一八〇四～一八一七）以降の史料で示されていた。それに対して本史料を含めた拙稿の安永・天明期の運上史料からも確認できた。この為替取引関係が、益富組の鯨商品を大量に販売するための流通的要因であり、益富組経営を成長させた資金調達方法であった。すなわち、鯨油取引を運上銀納入との関係で上手く利用していた益富組の販売活動が浮かびあがってくる。⁽¹⁶⁾

そして、西海地方の平戸藩領における巨大鯨組の鯨油採取の中心となっていた鯨こそが勢美鯨であった。⁽¹⁷⁾

三、天明六・七年の益富瀬戸・大嶋・御崎組の運上史料の分析

史料二

（表紙）

「天明七

午冬ろ

瀬戸大嶋鯨組御運上銀指引帳
未春迄 御崎

未

五月 御勝手方

益富又左衛門殿

」

午冬ろ

瀬戸組運上先納
未春迄

益富又左衛門

一 銀三十拾貫目

浦請銀

一 銀六拾貫目

米先納

一 銀六拾貫目

魚運上先納

一 銀百五拾貫目

油運上先納

〆銀三百貫目

右同生属御崎組

一 銀三拾貫目 米先納

一 銀拾八貫目 魚運上先納

一 銀貳拾五貫目 油運上先納

一 銀七拾三貫目

一 右同大嶋組

一 銀三拾五貫目 魚運上先納

一 銀拾五貫目 米先納

一 銀五拾貫目

一 銀三拾四貫拾匁

但、午冬瀬戸組^{ニ而}取揚候鯨数貳拾八本之内、勢美本魚九本、御運上銀貳拾貫貳百五拾目、同見分物拾四本、御運上銀拾壹貫六百八拾五匁、座頭見分物壹最合三本、御運上銀貳貫七拾五匁、右魚数^{ニ当ル}御運上銀

一 銀八貫百八拾目

但、右同所春浦^{ニ而}取揚候鯨数拾五本之内、勢美本魚壹最合壹本、御運上銀四貫五百目、同見分物四本、御運上銀壹貫六百四拾目、座頭本魚壹本、御運銀七百五拾目、同見分物五本、御運上銀九百八拾九匁、長須見分物貳本、御運上銀三百壹匁、右魚数^{ニ当ル}御運上銀

一 銀七拾貳貫九百八拾五匁

但、右同所冬・春魚数四拾三本^{ニ当ル}御運上油千六百拾七挺之内、御台所御用、同百五拾丁、御家中油、引残千三百

貳拾七丁^{ニ当ル}銀、壹挺五拾五匁替

一 銀拾八貫目

但、生属御崎組受切魚運上銀

一 銀三拾五貫七百五拾目

但、右同所定油六百五拾丁^{ニ当ル}銀壹丁五拾五匁替へ

一 銀八貫五百九拾目

但、大嶋組・津吉春浦共^ニ取揚候鯨数拾七本之内、勢美三本、定運上銀三貫目、雜物拾三本、定運上銀五貫五百九拾目、同白子壹本、運上なし、右魚数^{当ル}銀

一 銀拾貳貫目

但、右同所冬・春魚数拾七本之内、壹本白子、運上なし、殘拾六本^{ニ当ル}油貳百貳拾丁、代壹挺五拾五匁かへ

一 銀拾九貫拾三匁五分壹厘

但、去午春指引之上納り前

一 銀三貫九百目

但、瀬戸組米先納六拾貫目、御崎三拾貫目、大嶋拾五貫目、銀百五貫目^{当ル}米四千三拾八俵壹斗三升八合四勺、去午春指引相違^{ニ而}米貳百俵代三貫七百目指引之通^ニ成候分此銀^{当ル}米百四拾貳俵九升貳合三勺、銀米四千八百八拾俵貳斗三升七勺渡前之處、四千三百三拾俵貳斗三升七勺相渡^ニ付指引殘百五拾俵渡り越成候分

合銀六百三拾五貫五百貳拾八匁五分壹厘^⑩

内六拾貫目	元記魚運上先納引
同百五拾貫目	右同油先納引
同拾八貫目	御崎組魚運上引
同貳拾五貫目	右同所油先納引
同三拾五貫目	大嶋組魚運上引
残三百四拾七匁五百貳拾八匁五歩壱りん	納り前
内納り方	
一 銀百八拾貫目	已十一月先操
内貳拾貫目	已十一月十二日江戸為替 ^{ニ而}
同百貫目	已十一月廿五右同断
同拾五貫目	已十二月六日長崎為替 ^{ニ而}
同四拾五貫目	已十二月十五日と同日迄八口爰元納り
一 銀百貳拾貫目	午正月先操
同三拾貫目	大坂為替 ^{ニ而} 納り
同九拾貫目	午正月廿六日より二月廿八日迄七口 ^{ニ而} 爰元納り
一 銀百貳拾貫目	午正月先操
但、江戸為替金貳千匁 ^{ニ而} 納り	
一 銀拾五貫目	午二月廿七日大嶋組米先納銀納り
一 銀五貫貳百目	
但、去 ^ル 申年江戸御指支 ^ニ 付葉山左内殿廻り被仰付候、出	

銀五拾貫目 ^ニ 当 ^ル 八朱之利分元銀之内掛入、去午年十三ヶ 月分渡り前	
一 銀七百七拾貳匁貳分	
但、御台所御用ていら三千百八拾八斤、代七百拾七匁三歩、 赤身七百貳拾九斤、代三拾四匁八歩、かぶら骨七貫五百目、 代拾壹匁貳歩五り、不 ^レ りく七貫貳百五拾目、代拾壹匁八歩 八り、右品々 ^ニ 当 ^ル 代銀	
一 銀四百四拾貫九百七拾貳匁貳分	納り高
内三百四拾七貫五百貳拾八匁五分壱厘	前記納り前引
残九拾三貫四百四拾三匁六分九りん	納り通預り
右者去午冬と当未春迄瀬戸・御崎・大嶋組・津吉春浦共 ^ニ 御運上 先納指引如斯御座候已上	
未	
五月	龜 洩与 助 ^印
	山口磯右衛門 ^印
益富又左衛門殿	
前書之通承届候以上	
	橋 本勇 平 ^印
	喜多川集 兵衛 ^印
	日 高治 左衛門 ^印
	岡 塚藤次右衛門 ^印
	都野川軍 兵衛 ^印

史料二から判明する点を、史料一と比較しながら列記している。

第一は、全体の捕獲数と捕獲鯨の種類についてである。瀬戸組は冬浦の二十八頭と春浦の十五頭であり、御崎組については不明であった。その代わりに大嶋組では、大嶋冬浦と津吉春浦を合わせた十七頭であったことが判明する。この津吉春浦とは、大嶋組が平戸島津吉浦へ遠征して鯨組を開いていた春浦のことである。史料一と同様に平戸藩領域内の壱岐の捕鯨漁場では、冬浦と比べて春浦での捕獲数の少なさがわかる。御崎組以外の捕獲数の合計は六十頭で、拙稿で分析した益富組の捕獲数からすれば若干少ないようにみえる。しかし、西海地方において他の鯨組が捕獲した数と比較しても決して低い捕獲数ではなく、安永・天明期では大漁であったと判断しても差し支えなからう。⁽¹⁸⁾

捕獲鯨の内訳をみると、瀬戸組の冬浦では、「勢美本魚」九頭と勢美「見分物」十四頭を合わせた二十三頭が勢美鯨であった。残りの五頭については「座頭見分物壱最合三本」とあり、座頭鯨であった。瀬戸組の春浦では、「勢美本魚壱最合三本」の三頭と「同見分物」四頭を合わせた七頭が勢美鯨であった。残りの八頭とは、「座頭本魚壱本」「同見分物五本」の座頭鯨六頭と、「長須見分物式本」の長須鯨二頭であった。大嶋組による大嶋冬浦と津吉春浦では勢美鯨の三頭と、それ以外の「雑物拾三本」「同白子壱本」と記された鯨を合わせた十七頭であった。⁽¹⁹⁾

史料一の勝本組では勢美鯨が多く捕獲されており、同じ壱岐の

瀬戸組においても勢美鯨の高い捕獲数がわかる。また、生月島の隣島である的山大嶋および平戸島津吉浦では、勢美鯨以外の捕獲鯨が多数みられた。生月島・的山大嶋・平戸島付近では、壱岐に比べて勢美鯨以外の座頭鯨や長須鯨の回遊が多かったと推測できる。西海地方における平戸藩領域内の捕鯨漁場での捕獲鯨には、恵まれた自然条件を活かした地域性がみられたのであった。⁽²⁰⁾

第二は、「取揚候鯨数」によつて定められた運上銀および運上油についてである。史料二からは、瀬戸組の冬浦と春浦における捕獲数と捕獲鯨の種類に関わる一頭あたりの運上銀は、史料一の勝本組と同様であったことが読み取れる。瀬戸組が冬浦で捕獲した「勢美本魚」は九頭とあり、計算してみると一頭あたりは二貫二百五十目であった。瀬戸組の春浦の「勢美本魚」三頭に対しては、一頭あたり一貫五百目であった。⁽²¹⁾史料二では御崎組についての記録が見当たらないが、大嶋組の大嶋冬浦と津吉春浦における勢美鯨一頭あたりは、「定運上銀」として一貫目であった。大嶋組では、御崎組よりさらに低く定額化されていたことがわかる。⁽²²⁾

瀬戸組の座頭鯨は一頭あたり七百五十目と記され、いずれの組においても勢美鯨の運上が最も高額であった。『勇魚取給詞』には、「背美一本の價、雑物二本に相當れば、たとへ雑物を取巻たるをり(23)にても背美を見出れば打捨て、背美に取掛るなり」と明記されていた。益富各組において勢美鯨の捕獲が最優先され、見事に成果をあげていたことは本史料からみて間違いなからう。

第三は、天明六・七(一七八六・八七)年における益富組の運

上銀についてである。まず瀬戸組の冬浦における「浦受銀」は、三十貫目であったことが判明する。次いで米、魚運上、油運上の先納銀については、瀬戸組では六十貫目、六十貫目、百五十貫目とあり、御崎組では三十貫目、十八貫目、二十五貫目と記載されている。史料一と同様に御崎組において「浦受銀」は見当たらない。また史料一の三十貫目であった魚運上が十八貫目と半分近く下がっている。したがって定額の先納銀の合計は、瀬戸組の三百貫目と御崎組の七十三貫目、さらには大嶋組の五十貫目を合わせた四百二十三貫目であった。なお、二つの史料からも瀬戸浦の定額の魚運上と油運上の先納銀は、勝本浦より高額であったことが判明した。

御崎組の魚運上が低い設定になっている理由は今後の課題であるが、この時期においても大嶋組を入れた益富組による三つの鯨組活動が許される代わりに、平戸藩へ膨大な運上銀が納めさせられていたことには変わりなかった。天明期において益富組が平戸藩領域内の捕鯨漁場を独占したことによる経営の成長は、松下が指摘していた平戸藩財政難による運上銀の増大と密接に関係していたと筆者は考える。⁽²⁴⁾ 益富組経営の成長を支えていたのが平戸藩領域内、とくに壱岐における勢美鯨の捕獲数であった。また先納に関しては、江戸為替、長崎為替、大坂為替がみられ、益富組があの手この手で運上銀を納めていたことが記録されていた。⁽²⁵⁾ すなわち天明期の運上史料とは、鯨油を中核とした鯨商品の流通とも絡んだ近世中期の高度な為替システムについて理解できる非常

に奥の深い史料であった。⁽²⁶⁾

四、おわりに

本稿による結論として次の四つに整理しておこう。

第一。天明期における益富組が、生月島御崎浦、壱岐の瀬戸浦と勝本浦、的山大島、平戸島津吉浦の五つの捕鯨漁場において捕獲した鯨を正確に捉えることができた。従来西海地方の捕獲対象の鯨については、捕鯨図説から主に勢美鯨、座頭鯨、児鯨、長須鯨の四種類とされてきた。⁽²⁷⁾ この四種類に対して、拙稿と本稿を合わせた運上史料の分析によると、益富組は平戸藩領域内の捕鯨漁場において勢美鯨と座頭鯨の二種類的大量捕獲に照準を定めて鯨組活動を展開していたことが判明した。

第二。第一の見解に対して、本稿の分析からさらに次のような捕鯨漁場と捕獲鯨の地域性が言える。勢美鯨と座頭鯨の二種類のうち、壱岐の両浦では勢美鯨が圧倒的に多く、本拠地の御崎浦では勢美鯨と座頭鯨の二種類を同程度に捕獲していたことが浮き彫りとなった。⁽²⁸⁾ 平戸藩領域内の捕鯨漁場では、鯨の回遊ルートによる捕獲鯨の地域性がみられた。西海捕鯨業における捕獲鯨の地域性については、鯨組史料の分析から初めての指摘である。

第三。壱岐の二つの捕鯨漁場の特殊性についてである。安永九年前後の史料でもみられたように、⁽²⁹⁾ 天明期においても壱岐の瀬戸浦と勝本浦の魚運上先納と油運上先納を比較してみると、瀬戸浦

の定額の運上銀が高額であった。また、勝本組には春浦先納が定められていた一方で、瀬戸組に見当たらなかった。従前杓岐の捕鯨漁場は、西海地方において最も捕獲数を誇った捕鯨漁場とされてきた。ところが筆者による一連の研究から杓岐の二つの捕鯨漁場には、冬浦と春浦の時期によつて捕獲数に優劣がみられた。平戸藩では瀬戸浦の冬浦を、また勝本浦では春浦を重視していた。すなわち、杓岐の両漁場の冬・春浦における勢美鯨の捕獲数が運上額に深く関係していたのである。いずれにしても勢美鯨の捕獲数については、杓岐の二つの漁場が大半を占めていた。当時、鯨油の採取量や鯨肉の販売価値などから推定して、最上級の鯨とされていた勢美鯨を最も多く捕獲できた捕鯨漁場が杓岐の瀬戸浦と勝本浦であった。杓岐の冬浦では勢美鯨を多く捕獲していたために、平戸藩領域内の捕鯨漁場において運上銀は最も高額に設定されていた。⁽³⁰⁾この杓岐の両漁場の存在は、平戸藩領域内において西海捕鯨業が近世初期から幕末期まで永続する最大の要因であった。そして益富組は、杓岐の両漁場を押えることで捕鯨業経営を発展させた。

第四。運上史料には、当然ながら平戸藩への運上額がはっきりと明記されていた。そのため、運上史料は藩と鯨組との上納関係をうかがい知ることのできる益富家文書のなかで重要史料の一群である。松下が、益富組の初期研究において見逃さずに運上史料に焦点をあてて、益富組と平戸藩の財政問題との関係性を明らかにしていただけに、運上史料の再考は半世紀近く見過ごされてき

た。しかしながら、松下の定量的分析に対して、定性的分析を意識して丹念に読み解いていくと、まず益富各組の捕獲数と捕獲鯨の種類について判明した。さらには、捕鯨漁場において捕獲された鯨の運上銀をどのような時期に、どのような手段で納めていたのかといった益富組の経営展開に関わることが読み取れた。運上納入のために必要とした資金調達については、江戸、大坂、瀬戸内、長崎そして下関、博多などの商人との鯨商品販売に伴う為替取引関係を知ることができた。⁽³¹⁾

益富組が巨大鯨組へと経営を発展させた要因としては、益富又左衛門家が鯨組主として、三十家ほどの山縣家・畳屋と名乗る分家・別家が同族団による緻密な管理組織を形成していたことが藤本隆士と筆者によりあげられていた。⁽³²⁾本研究では、従来指摘されてきた発展要因のみならず、捕獲鯨の種類と地域性が経営発展に密接に関係していたことが浮かびあがった。天明期の運上史料は、益富組の経営発展について捕獲鯨と捕鯨漁場と運上銀の諸関係で把握できる貴重な史料であった。運上史料については、今後も引き続き、他の史料と結びつけた分析を行い、一層深めていきたい。

附記

本稿は、二〇一三・二〇一四年度中部大学特別研究費に基づいて活動した研究成果の一部である。本稿は、二〇一三年度社会経済史学会中国四国部会大会および地域漁業学会第五十五回大会での報告を再考したものである。報告の際に有益なご指摘やご教示を下さった先生方に、記して厚く御礼申し上げます。

げたい。

また本稿の作成にあたって、益富家文書および益富組を中心とした近世西海捕鯨業史に関する経済史・経営史研究については、恩師の藤本隆士先生（福岡大学名誉教授）よりご指導を賜った。歴史地理学・民俗学的観点からの分析の重要性については、恩師の田畑久夫先生（昭和女子大学大学院教授）よりご指導を賜った。

近世・近代漁業史的視点および神奈川大学日本常民文化研究所所蔵『漁業制度資料 筆写稿本』の活用方法については、伊藤康宏先生（島根大学教授）、田島佳也先生（神奈川大学教授）、片岡千賀之先生（長崎大学名誉教授）、小岩信竹先生（東京国際大学教授）をはじめとする先生方から水産史研究会ならびに国際常民文化研究機構の共同研究会を通じて、数多くのご指導を賜った。ここに記して深甚なる謝意を表したい。

注

- (1) 末田智樹「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」、同「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」、同「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」、同「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」、同「寛政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相」、同「寛政初中期平戸藩領益富組の取揚鯨と運上銀」。以下、とくに出版社と出版年を具体的に示さない文献は、引用・参考文献に掲げている。また、頁数を示していない場合は文献全体に関係しているためである。
- (2) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について」。
- (3) 益富家文書の運上史料を使用し、捕獲鯨と運上銀に限定して明らかにしたことを整理している。
- (4) 末田前掲「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」、同前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」、同前掲「寛

政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相」、同前掲「寛政初中期平戸藩領益富組の取揚鯨と運上銀」。

- (5) 近年の代表的な研究では、中國成生・安永浩『鯨取り絵物語』および森弘子・宮崎克則『西海捕鯨絵巻の特徴』などがある。
- (6) 秀村選三・藤本隆士他編『益富家文書年代順目録』三頁に記されている。目録（一連番号）では、史料一はNo.三九四、史料二はNo.三九一である。
- (7) 末田前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁。
- (8) 末田前掲「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」一二五頁。
- (9) 末田前掲「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」六九頁。
- (10) 末田前掲「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」六七頁、同前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁。
- (11) 末田前掲「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」六七頁、同前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁、同前掲「寛政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相」一八三―一八四頁。
- (12) 末田前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁、末田前掲「寛政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相」一八三頁。
- (13) 武野要子「前目勝本鯨組永統鑑」一四五頁。
- (14) 末田前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁。
- (15) 末田前掲「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程」二四五頁、同前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」六・九・十一頁。
- (16) 藤本隆士「西海捕鯨業経営と福岡藩」、同「鯨油の流通と地方市場の形成」。
- (17) 『勇魚取絵詞』（宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第十巻、三一書房、一九七〇年）三〇三頁。
- (18) 末田前掲「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」、同前

- 掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」。また同時期ではないが、元禄期頃の有川組の年間捕獲頭数については、西村次彦『五島魚目郷土史』（西村次彦遺稿編集会、一九六七年）一二二〜一二九頁を参照。
- (19) 末田前掲「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」、同前掲「寛政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相」。
- (20) 鯨組の原史料に基づいた西海捕鯨業における捕獲鯨の地域性に関する指摘は、本稿が初めてであると思われる。
- (21) 末田前掲「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽」六七頁、同前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁。
- (22) 末田前掲「寛政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相」。
- (23) 前掲『勇魚取絵詞』二八八頁、末田前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」五頁。
- (24) 益富組経営の視点から運上史料を分析すると、松下による益富組と平戸藩財政問題との関係性に視座を置いた指摘とは異なることが判明したと考える。
- (25) 拙稿において分析した運上史料にも多く見られる。松下の研究にはみられなかった運上史料から読み取れる内容の一つであろう。
- (26) 藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、同前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」。
- (27) 前掲『勇魚取絵詞』ほか捕鯨図説において捕獲鯨の紹介がみられる。
- (28) 今後も西海地方における他藩の捕鯨漁場における捕獲鯨の検討が必須作業であり、さらには紀州・土佐などの太平洋沿岸および西海以外の長州などの日本海沿岸の捕獲鯨との比較が必要であろう。
- (29) 末田前掲「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程」。
- (30) 運上史料から平戸藩領域の捕鯨漁場の価値が判明し、これも松下の分析から指摘がなかったことである。沓岐の捕鯨漁場へは、大村藩松島を拠点として活動していた深澤組が遠征しており、沓岐の瀬

戸・勝本両浦は近世中期より西海地方の有数な捕鯨漁場であった。

(31) 藤本前掲「西海捕鯨業経営と福岡藩」、同前掲「鯨油の流通と地方市場の形成」。

(32) 藤本隆士「近世西海捕鯨業経営と同族団(一)」、同「近世西海捕鯨業経営と同族団(二)」。末田智樹「藩際捕鯨業の展開」。

引用・参考文献

- 荒本文朗(二〇〇八)「五嶋有川湾における網取り捕鯨の歴史」、『立教大学日本学研究所年報』第七号
- 岩崎義則(二〇一〇)「捕鯨業者井元弥七左衛門と平戸藩―井元家文書の伝来とその分析―」九州大学『史淵』第一四七輯
- 魚屋優子(二〇〇三)「小値賀島の捕鯨―藤松く小田く大阪屋組の捕鯨活動」『長崎県地方史だより』第六十一号
- 遠藤正男(一九三六)「幕末鯨漁業に於ける経営形態」九州大学『経済学研究』第六卷第三号
- 及川将基(二〇一〇)「鯨組組織と対馬鯨場をめぐる諸関係」大阪市立大学大学院文学研究科・塚田孝編『近世身分社会の比較史』
- 小葉田淳(一九五〇)「西海捕鯨業について」京都大学『平戸学術調査報告』、後に小葉田淳『日本経済史の研究』思文閣出版、一九七八年に所収
- 片岡千賀之(二〇一二)「明治期における長崎県の捕鯨業―網取り式からノルウェー式へ―」『長崎大学水産学部研究報告』第九十三号
- 川淵龍(一九九四)「初期平戸町捕鯨組織家の人的考察」平戸市教育委員会編『ビジョン策定調査報告書・歴史史料調査報告書』平戸市
- 古賀康士(二〇一〇)「西海捕鯨業における地域と金融―幕末期沓岐・鯨組小納屋の会計分析を中心に―」『九州大学総合研究博物館研究報告』第八号
- 古賀康士(二〇一一)「西海捕鯨業における鯨肉流通―幕末期沓岐小納

屋の販売行動を中心に」『九州大学総合研究博物館研究報告』第九号

古賀康士（二〇一二）「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織——幕末期小値賀島大坂屋を中心に」『九州大学総合研究博物館研究報告』第十号

古賀康士（二〇一三）「地域産業としての長州捕鯨——長門市くじら資料館所蔵文書からみえるもの」『下関市立大学』『地域共創センター年報』第七号

古賀康士（二〇一四）「彦岐勝本浦土肥組の捕鯨文書について」『平戸市生月島町博物館』『島の館だより』第十八巻

古賀康士（二〇一四）「幕末維新时期土佐藩における藩営捕鯨業——開成館捕鯨局の経営と労働組織」『土佐山内家宝物資料館研究紀要』十二号

柴田恵司・高山久明（一九七九）『鯨船』『海史研究』第三十一号

柴田恵司（一九八〇）『西海鯨鯢記』『海史研究』第三十四号

柴田恵司（一九九五）『肥前大村深澤鯨組』石井謙治編『日本海史の諸問題 対外関係編』文献出版

柴田恵司（一九九六）『九州鯨組を支えた備後鞆と田島の人々』『海史研究』第五十三号

末田智樹（一九九二）「近世西海捕鯨業益富組の一研究——天保十・十一年大村藩江島捕鯨業を中心として」『福岡大学大学院論集』第二十四巻第二号

末田智樹（一九九三）「近世後期西海捕鯨業の展開——平戸藩生月島益富組の生産組織を通じて」『福岡大学大学院論集』第二十五巻第二号

末田智樹（一九九四）「近世前・中期における西海捕鯨業の成立と発展——技術と資本」『福岡大学大学院論集』第二十六巻第二号

末田智樹（二〇〇四）『藩際捕鯨業の展開——西海捕鯨と益富組——』御茶

の水書房

末田智樹（二〇〇五）「江戸時代に存在していた国際的な捕鯨業？」中部大学編『アリーナ』第二号

末田智樹（二〇〇八）「近世西海捕鯨業史研究の現状と五島藩捕鯨業の地域性」『立教大学日本学研究所年報』第七号

末田智樹（二〇〇八）『近世日本捕鯨業の歴史地理学的研究——西海捕鯨業地域の形成と益富組の藩際経営——』昭和女子大学二〇〇七年度博士論文

末田智樹（二〇〇九）「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程——西海捕鯨業地域の特殊性の分析——」『岡山大学経済学会雑誌』第四十巻第四号

末田智樹（二〇一〇）「自著を語る 末田智樹『藩際捕鯨業の展開——西海捕鯨と益富組——』御茶の水書房、二〇〇四年四月」中部大学編『アリーナ』第八号

末田智樹（二〇一二）「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程——益富又左衛門組の運上に関する史料紹介——」神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第三号

末田智樹（二〇一三）「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」神奈川大学『国際常民文化研究叢書——日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究——』第二巻

末田智樹（二〇一三）「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽——天明初期の益富組の鯨捕獲をかいま見る——」『民俗と歴史』第三十一号

末田智樹（二〇一三）「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程——安永九年の鯨運上史料の一瞥——」『中部大学人文学部研究論集』第三十号

末田智樹（二〇一三）「寛政前期平戸藩領における捕鯨業の一樣相——益富大嶋組の運上史料から探る——」神奈川大学『国際常民文化研究機

構年報 第四号

末田智樹(二〇一四)「寛政初中期平戸藩領益富組の取揚鯨と運上銀」

神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第五号

高田茂廣(一九八八)「西海捕鯨遺文」『福岡市立歴史資料館研究報告』

第十二集

武野要子(一九六九)「沓岐捕鯨業の一研究—益富組小納屋の分析—」『福岡大学創立三十五周年記念論文集 商学編』

岡太学創立三十五周年記念論文集 商学編

武野要子(一九七九)「前目勝本鯨組永統鑑」福岡大学『商学論叢』第

二十四卷第一号

田島佳也(一九九五)「小川嶋鯨鯨合戦・解題」『日本農書全集』第五十

八巻、農山漁村文化協会

立平進(一九九五)『西海のくじら捕り—西海捕鯨の歴史と鯨絵巻—』

長崎県労働金庫

田畑久夫(一九八七)「西海捕鯨業の変遷—沓岐島を事例として—」『民

俗と歴史』第十九号

鳥巢京一(一九九三)『西海捕鯨業史の研究』九州大学出版会

鳥巢京一(一九九九)『西海捕鯨の史的研究』九州大学出版会

中倉光慶(一九八三)「西海捕鯨と井元弥七左衛門家について—北松浦

郡大島村—」『松浦党研究』第六号

中園成生(二〇〇二)『くじら取りの系譜—概説日本捕鯨史—』長崎新

聞社

中園成生(二〇〇六)『改訂版くじら取りの系譜—概説日本捕鯨史—』

長崎新聞社

中園成生(二〇〇七)「西海漁場における網掛突取法捕鯨法の開始」平

戸市生月島町博物館『島の館だより』第十一巻

中園成生(二〇〇八)「大島捕鯨の概要」平戸市生月島町博物館『島の

館だより』第十二巻

中園成生・安永浩(二〇〇九)『鯨取り絵物語』弦書房

中園成生(二〇一四)「益富組の捕鯨活動」野間晴雄編『環東シナ海を

めぐる文化とひとの交流』日本学術振興会・基盤研究(A)報告書

西村次彦(一九六七)『五島魚目郷土史』西村次彦遺稿編集会

服部一馬(一九五三)「幕末期蝦夷地における捕鯨業の企図について」『横

浜大学論叢』第五巻第二号

秀村選三(一九五二)「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係(一)」九

州大学『経済学研究』第十八巻第一号

秀村選三(一九五二)「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係(二)」九

州大学『経済学研究』第十八巻第二号

秀村選三・藤本隆士(一九七六)「西海捕鯨業」『江戸時代図誌 西海道

一』第二十二巻、筑摩書房

秀村選三(一九八〇)「近世後期肥前小川島捕鯨業の一断面—草場佩川

の見たる—」九州大学『経済学研究』第四十六巻第一・二合併号

秀村選三(一九九六)「近世西海捕鯨業に関する史料(一)—肥前国生月

島益富家「所々組方永代記」—」久留米大学『産業経済研究』第三

十六巻第四号

秀村選三(一九九六)「近世西海捕鯨業に関する史料(二)—肥前国生月

島益富家「二番永代記」—」久留米大学『産業経済研究』第三十七

巻第一号

秀村選三(一九九六)「近世西海捕鯨業に関する史料(三)—肥前国生月

島益富家「二番永代記」—」久留米大学『産業経済研究』第三十七

巻第二号

秀村選三(一九九六)「近世西海捕鯨史料『五島黒瀬組定』—肥前国生月

島益富組文書より—」久留米大学『比較文化研究』第十八巻

秀村選三(一九九七)「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」

久留米大学『比較文化研究』第十九巻

秀村選三(一九九七)「近世西海捕鯨業史料『前目定目写』—肥前国生月

島益富組文書より—」久留米大学『産業経済研究』第三十八巻第一

号

- 秀村選三(一九九七)「幕末西海捕鯨業における益富組の労働組織の史料」久留米大学『産業経済研究』第三十八巻第三号
- 秀村選三(二〇〇七)「近世西海捕鯨業における鯨組の諸断面―益富組・中尾組について―」九州文化史研究所紀要』第五十号
- 福本和夫(一九七八)『日本捕鯨史話―鯨組マニファクチュアの史的考察を中心に―(新装版)』法政大学出版局
- 藤本隆士(一九六四)「幕末西海捕鯨業の資金構成―生月島益富家の場合―」福岡大学創立三十周年記念論文集 商学編
- 藤本隆士(一九六七)「西海捕鯨業経営と福岡藩―地方市場の一考察―」宮本又次編『商品流通の史的研究』ミネルヴァ書房
- 藤本隆士(一九六七)「鯨油の流通と地方市場の形成」九州文化史研究所紀要』第十二号
- 藤本隆士(一九七二)「近世西南地域における銀錢勘定」福岡大学『商学論叢』第十七巻第一号
- 藤本隆士(一九七五)「近世西海捕鯨業経営と同族団(一)」福岡大学『商学論叢』第十九巻第四号
- 藤本隆士(一九七五)「近世西海捕鯨業経営と同族団(二)」福岡大学『商学論叢』第二十巻第一号
- 藤本隆士(一九七六)「益富又左衛門」『豪商百人(別冊太陽)』平凡社
- 藤本隆士(一九七八)「近世西海捕鯨業史の研究―平戸藩生月島益富組を中心として―」九州大学『経済学研究』第四十四巻第二・三号
- 藤本隆士(一九七九)「捕鯨図誌『勇魚取絵詞』考」福岡大学『商学論叢』第二十四巻第二・三号
- 藤本隆士(一九八二)「西海捕鯨と鯨油の流通」『日本農書全集』第三十巻月報
- 藤本隆士(一九八三)「福岡藩と藩政経済―博多相物問屋をめぐって―」『福岡県史 近世研究編 福岡藩(二)』福岡県

- 藤本隆士編(一九八四)「有川鯨組式法定(一)」福岡大学『商学論叢』第二十八巻第四号
- 藤本隆士編(一九八四)「有川鯨組式法定(二)」福岡大学『商学論叢』第二十九巻第一号
- 藤本隆士(一九九二)「徳川期における小額貨幣―銭貨と藩札を中心に―」『社会経済史学』第五十七巻第二号
- 藤本隆士編(一九九四)「近世西海捕鯨業史料―山縣家文書―」福岡大学総合研究所
- 牧川鷹之祐(一九六八)「西海捕鯨考」『筑紫女学園短期大学紀要』第三号
- 牧川鷹之祐(一九六九)「『鯨組方一件』の研究」『筑紫女学園短期大学紀要』第四号
- 松下志朗(一九六九)「西海捕鯨業における運上銀について―平戸藩領生月島益富組を中心に―」福岡大学創立三十五周年記念論文集 人文編
- 安永浩(二〇〇三)「東松浦地域における古式捕鯨の操業について」佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』第九集
- 安永浩(二〇〇九)「小川島漁場を主題とする二つの捕鯨図―肥前国小川島鯨場絵図と『小川島捕鯨図屏風』」佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』第十五集
- 安永浩(二〇〇九)「絵図史料にみる近世西海鯨組の納屋場構造」佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』第十五集
- 安永浩(二〇〇九)「西海の網組時代に活躍した熊野出身者の末裔―十八世紀後半の五島を舞台として―」『熊野誌』第五十六号
- 安永浩(二〇一三)「小川島鯨組一切記」とは何か(附)史料翻刻 享和元年「御手鯨組一切記」、安政四年「小川鯨組定法一切記」佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』第十九集
- 森弘子・宮崎克則(二〇一〇)「天保三年『勇魚取絵詞』版行の背景」『九

州大学総合研究博物館研究報告』第八号

森弘子・宮崎克則(二〇一二)「大槻清準『鯨史稿』と大槻玄沢『鯨漁叢話』の關係性」『九州大学総合研究博物館研究報告』第十号

森弘子・宮崎克則(二〇一二)「西海捕鯨絵巻の特徴―紀州地方の捕鯨絵巻との比較から―」西南学院大学『国際文化論集』第二十六卷第二号

森弘子・宮崎克則(二〇一三)「大槻清準『鯨史稿』と杉田玄白『解体新書』の關係性」『九州大学総合研究博物館研究報告』第十一号

森弘子・宮崎克則(二〇一四)「唐津藩小川島の捕鯨史料(一) 文政く天保頃『鯨組方一件』」西南学院大学『国際文化論集』第二十八卷第二号

森弘子・宮崎克則(二〇一四)「西南学院大学博物館寄託『松澤善裕氏所蔵文書』に見る鯨組と地域漁業の軋轢―平戸藩生月島の「御崎大納屋」から大島(的山大島)への書状―」『西南学院大学博物館研究紀要』第二号

森弘子・宮崎克則・安高啓明(二〇一四)「松澤善裕氏所蔵文書目録」『西南学院大学博物館研究紀要』第二号

森田勝昭(一九九四)『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会

山口麻太郎(一九五九)「初期日本捕鯨の諸問題」『社会経済史学』第二十五卷第五号

山口麻太郎(一九八〇)「西海捕鯨―網捕法の創始について―」『西日本文化』第一六六号

指方邦彦(一九九二)「西海捕鯨と深沢組など鯨組の盛衰について」『大村史談』第四十号

*参考文献としては近世西海捕鯨業史に関する研究を中心に掲げ、史料、自治体史、図録類などは省いた。

(二〇一四年一〇月三十一日 受理)